

から8月上旬ごろは全体的に天候に恵まれて作業は順調に進行した。収穫期に雨が続くと品質が下がるが、極端な降雨がなかったことで「製品歩留まりは9割以上、等級もほとんど1等級を確保できた」（帯広支所）としている。

ホクレンが取り扱う管内20年産の作付面積は3万6,500ヘクタール。前年より300ヘクタールほど少ないが、全道の40%ほどで地域別では最も多い。前年秋に種をまく秋まきと春まきがあり、春まきは1%未満。

**十勝JA取扱高3,456億円 前年比3%減 過去2番目の高水準** 2020年12月25日

2020年産農畜産物の管内JA取扱高（概算）が25日午前、十勝総合振興局で発表された。耕種（畑作）と畜産の合計額は前年比3%減の3,456億円。干ばつ、日照不足など天候不順や新型コロナウイルス感染拡大による価格下落の影響を受けながらも、過去最高だった昨年（3,549億円）に次ぐ2番目の水準を記録した。

十勝地区農協組合長会（有塚利宣会長）、十勝農協連（山本勝博会長）、十勝総合振興局（水戸部裕局長）が管内24JAの協力を受けて試算している。

全体の62%を占める畜産部門は2,148億円で、同部門で過去最高だった前年と同額。3年続けて2,000億円を超えた。

酪農は通年で前年を上回る生乳生産を維持。个体販売額はやや下回ったが乳価の上昇もあり6%増。

肉用牛は外食需要の減少に伴う枝肉や素（もと）牛取引価格の下落で、10%減。

耕種部門は4～6月が干ばつ傾向、その後も雨や日照の不足が極端で、収量や品質に影響。7%減の1,308億円だった。

小麦は入札価格が上昇したが、6月下旬～7月の日照不足で収量が前年より下回り、12%減。豆類は大豆が前年を上回る収量を確保したが、小豆などで8月の高温、収穫時の雨による品質低下が見られて17%減。ジャガイ

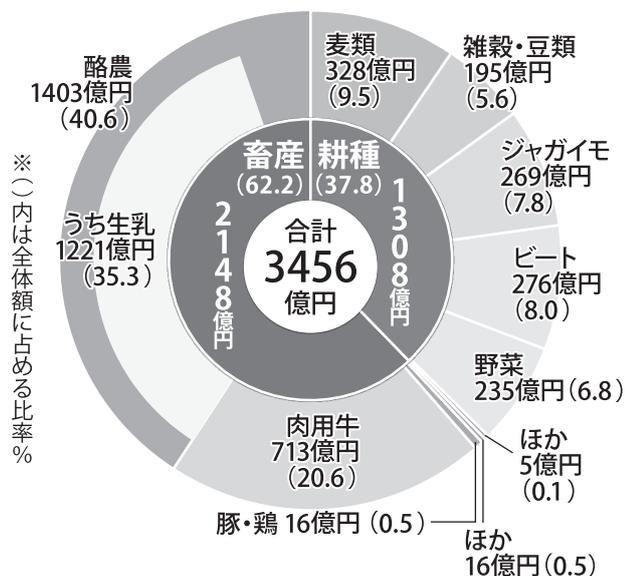
ものでんぷん価は前年より高かったが、干ばつの影響で1%減。ビートは根部肥大が進んで収量は前年並みだったが、糖度が前年を下回り4%減。野菜は市況価格が堅調に推移し、4%増だった。

取扱高全体では前年減だが、天候不順やコロナ禍による肉牛や小豆などの価格下落の影響が広がった中、過去2番目の水準を確保した点を関係者は評価する。

十勝地区農協組合長会の有塚会長は「生産者のたゆみない努力、国・市町村・関係団体の多大なる努力のたまもの」、十勝農協連の山本会長は「関係者一丸の努力の成果が『十勝農業ビジョン2021』が目標とする3,500億円に迫り、史上2番目の3,456億円という結果になった」とそれぞれコメントした。

取扱高は管内24JAの取扱見込み額で、JA以外の商社が扱う金額は含んでいない。例年は3機関による記者発表を行っていたが、今年はコロナ感染拡大防止のため中止とし、十勝総合振興局内で公表した。

◆2020年産 管内24JAの取扱高



◆JA取扱高の推移

